平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	おかやまけんりつくらしきちゅうおうこうとうがっこう
学校名	岡山県立倉敷中央高等学校

校 長 名：佐藤　正敏

所 在 地：岡山県倉敷市西富井１３８４

電話番号：086-465-2559

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	看護（基礎看護）

≪研究主題≫

高等学校における看護実践能力の育成に向けた取組－看護技術プログラムの導入とその評価－

【研究の要点】

【調査研究のねらい】

卒業後，医療現場の変化に対して柔軟な対応ができるよう，本校における看護基礎教育の見直しを行う。特に，看護実践に必要とされる，専門知識の定着及びコミュニケーション能力の形成を図るため，授業展開の改善を行う。また，看護技術の定着度の評価方法を検討し，看護実践能力の育成及びキャリア発達の基盤形成を行う。

【看護実践能力の基盤づくり】

1　看護技術プログラムの作成及び評価

看護技術プログラムについてはこれまで看護技術マトリックスの作成，基礎看護（基礎看護技術）を軸として，他科目との連動，特に解剖生理や成人看護との連動を意識した進度表の作成，校内演習で行う看護技術項目について観点別評価表を作成した。

2　実習施設に向けた授業公開について

「看護実践能力アンケート」を行い，教員と実習指導者とそれぞれの立場から看護実践能力をどのようにとらえているか調査し，本校の看護基礎教育について意見交換を行った。その結果を踏まえて，実習指導に役立ててもらうことを目的として，実習指導者に対して授業公開を実施した。

[考察及び指導の改善]

2年間の看護技術プログラムを導入すると共に，専門知識を定着させることにより，看護臨床実習での専門職者としての態度，知識，看護技術の統合を実習において図れるよう取り組んできた。今年度行った看護臨床実習における「看護技術経験アンケート」の結果では，平成 19 年度入学生の3年次と研究対象学年の3年次とでは，看護技術 86 項目のうち 21 項目で自己到達度の高まりがあった。特に「清潔・衣生活援助技術」「症状・生体機能管理技術」「感染の予防技術」「安全管理の技術」の項目で有意差が見られ，特に「バイタルサイン」「スタンダードプリコーション」「体位保持」では，はっきりとした有意差が見られた。

本研究を行うに当たり，単に看護技術の手順を教えるだけではなく，看護技術を行う際の患者の観察視点，また看護技術を行う際の患者の安全・安楽について常に考えながら行うよう意識的に授業や演習において指導を行ってきた。その効果が今回のアンケート調査からもうかがうことができる。

その結果，看護実践能力については生徒の実習前後の比較から，特にヒューマンケアの基本に関する実践能力において 14 項目中9項目で有意差が見られた。看護において基盤となる関係性の構築，コミュニケーション能力の向上が図れたと考えることができる。

【専門知識の定着と基盤づくり】

1　授業参加オリエンテーションについて

研究対象学年には1年次から，専門科目について，授業参加方法，授業ノートの作成方法及び予習・復習の方法について詳細なオリエンテーションを実施した。昨年度からは他学年でも，生徒の知識の定着が図れるようオリエンテーションを導入した。また授業ノートは科目ごとに，週1回程度，各担当教員が学習内容の理解の程度を確認している。授業ノートの確認後，学習内容の理解が不足している生徒に対しては，繰り返し個別指導を行っている。

2　放課後学習会の実施

昨年度から高校3学年を縦割りにグループ編成し，3年生を中心に解剖生理についての学習会を行った。今年度も1年生の解剖生理の学習進度に合わせ，9月から週に1回，30 分程度実施している。

放課後学習会は，これまで学んだ専門知識を下級生に教えることにより，曖昧であった知識をより明確化し，学びを深めることやコミュニケーション能力を高めることも意図している。

[考察及び指導の改善]

授業ノート作成の実態とその効果について，生徒・教員双方のアンケート結果から，他学年に比べて研究対象学年は，意欲的な取組が見られ，家庭での学習が定着し，授業理解に大いに役立っていることが分った。

授業ノートの活用ができている生徒と努力を要する生徒では，成績にも大きな差があり，今後の課題としては，より個別の指導が必要であると考える。

教員側においては，授業ノートの確認により，生徒の理解度を把握することができ，授業後の指導に役立てることができている。

放課後学習会についてのアンケート結果から，1・2年生では「授業で理解できなかったことを聞くことができる」「何がわかって何がわからないのかが理解できた」，3年生では「文献を手に取る機会が増えた」「わかりやすく伝えることの難しさを知った」などすべての学年において効果的な学習の機会となっていることがわかる。また，放課後学習会では専門知識の理解を深めることを目的としていたが，学年間の交流により，学習ノートのとり方や勉強の取り組み方など学習面での疑問等について生徒同士で情報交換することができており，生徒個々が抱える課題解決に向けての効果が高いと考える。

改善点としては，グループ人数が 10 人程度であるため，人数の多さや，説明をする際にホワイトボード等の物品が不足するなど物理的な面での改善が必要であると考える。

【成果と課題】

看護技術プログラムを導入すると共に，専門知識を定着させることにより，看護臨床実習での「看護技術経験アンケート」「看護実践能力アンケート」の結果から，生徒自身の自己肯定感が高まったことがわかり，看護実践能力及びキャリア発達の基盤を育成することができたと考えられる。

今後は，客観的に自己を振り返ることができる力を育成していくことが課題となる。今回作成した看護技術プログラムを活用し，自己評価と他者による客観的評価の一致が見られるよう，自己課題の発見・解決に向け取り組んでいきたい。

Ⅰ　研究指定校の概要

1　学校・地域の特色及び実態

・主体的な学習習慣が身に付いていない生徒が多い。
・生徒の多くは，生活体験が不足しているため，日常生活の援助場面がイメージ化しにくい。
・教員側と実習施設側の求める，実習での看護実践能力のとらえ方に違いが見られる。

2　学校の概要（平成 22 年 5 月 1 日現在）

課程	学科	1年		2年		3年		4年		5年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	5	200	4	158	5	200					14	558
	家政科	1	40	1	40	1	39					3	119
	看護科	1	40	1	40	1	40	1	35	1	32	5	187
	福祉科	1	40	1	34	1	35					3	109
計		8	320	7	272	8	314	1	35	1	32	25	973

教員数　95 名（12 名）

1年	看護基礎医学　2単位	3年	看護基礎医学　5単位
	基礎看護　4単位		基礎看護　2単位
	看護臨床実習　1単位		成人・老人看護　5単位
2年	看護基礎医学　4単位		母子看護　3単位
	基礎看護　5単位		看護臨床実習　6単位
	看護情報処理　2単位		
	看護臨床実習　3単位		

（平成 20 年度入学生）

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

高等学校における看護実践能力の育成に向けた取組－看護技術プログラムの導入とその評価－

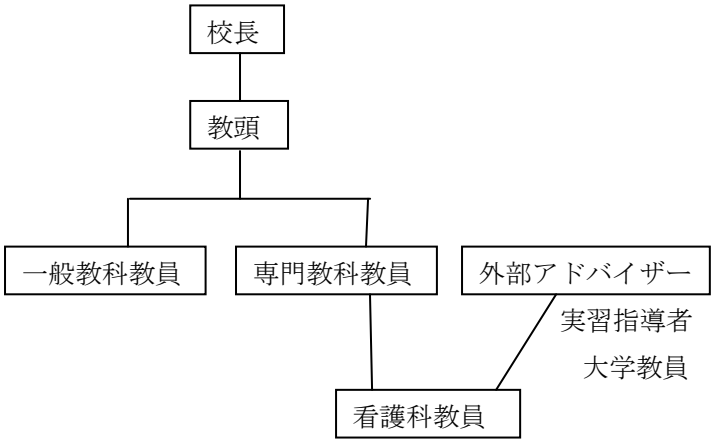
(2) 研究主題設定の理由

近年，医療を取り巻く状況は一段と厳しく，また急激に変化してきている。このような状況の中で看護基礎教育においてもH 20 年に指定規則が改正された。

看護においては，高い医療倫理観を基盤とした看護実践能力が求められている中にあって，看護基礎教育を取り巻く実習環境は年々厳しくなっている。本校においても，主体的な学習習慣が定着していない生徒が多く，さらに，生活体験の不足している高校生に対して，看護基礎教育を行うことの難しさを感じている。

中学校卒業時から看護師になりたいという希望を抱き入学してくる生徒に対し，卒業後医療現場の変化に柔軟な対応ができるよう，本校における看護基礎教育のあり方を見直し，看護実践能力の育成及びキャリア発達の基盤形成を目標とし，研究を進めることとした。

(3) 取組体制



(4) ２年間の主な取組

平成21年度	・看護技術プログラムの作成 ・専門科目の授業参加方法についての詳細なオリエンテーションの実施 ・実習施設指導者との意見交換 ・実習施設及び５年一貫校への授業公開
平成22年度	・看護技術プログラムの実施・評価 ・放課後学習会の実施 ・実習施設及び５年一貫校への授業公開 ・看護実践能力について，生徒・教員・実習指導者間での評価

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

看護実践能力の育成に向けた取組

(2) 具体的な取組

①　看護実践能力の基盤づくり

【看護技術プログラムの作成及び評価】

看護臨床実習において看護技術経験及び自己到達度を調査した結果，看護技術経験項目が少なく，また到達度も低かった。そのため，H19 年度より校内での看護技術教育について検討を行い，これまでに基礎看護（基礎看護技術）を軸として，他科目，特に解剖生理や成人看護との連動を意識した進度表を作成し，授業を行っている。また，看護技術マトリックスを作成し，各科目がより看護援助を意識した授業が行われるよう努めた。昨年度は研究対象学年で行う看護技術演習項目について，観点別評価表を作成し，評価規準を明確にした。

今年度は校内で行われる全ての看護技術演習項目について評価表を作成し，各単元の最初の授業の際に評価表を配布し，評価規準を基に自己学習や技術練習に取り組めるようにした。評価表はポートフォリオにまとめ，看護技術の習得の振返りが自らできるように工夫した。

看護技術プログラムの効果についての評価は，看護技術プログラムを導入していないH19 年度入学生の 3 年次と看護技術プログラムを導入したH20 年度入学生の 3 年次の看護臨床実習での「看護技術経験アンケート」を基に比較検討した。

【実習施設に向けた授業公開について】

本研究を行うに当たり，教員と実習指導者とそれぞれの立場から看護実践能力をどのようにとらえているか調査を行い，本校の看護基礎教育について意見交換を行った。

その結果「高校部分での教育が見えにくい」「実習においてもっと技術を体験させたい」などの意見があった。

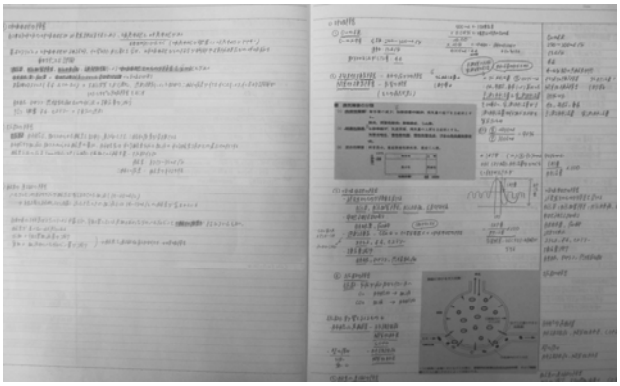
そこで，生徒が学校で看護技術をどのように学んでいるか，また，実習とは違う学校での様子を知ることで，実習指導に役立ててもらうことを目的として，昨年度３回，「フィジカルアセスメント」「キネステティクを活用した体位変換」「感染管理の実際」について授業公開を実施した。今年度は１回，「フィジカルアセスメント」について実施した。

②　専門知識の定着と基盤づくり

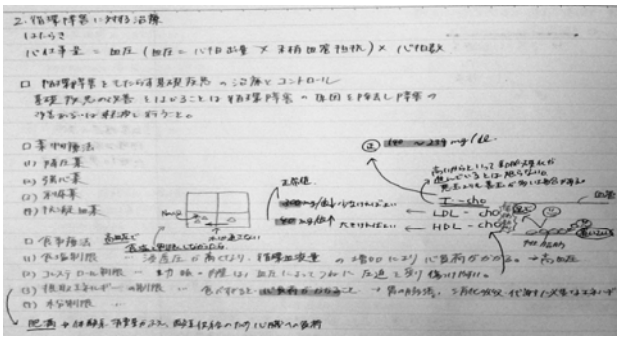
【授業参加オリエンテーションについて】

専門科目の初回の授業では，必ず詳細なオリエンテーションを行い，授業への参加の仕方，授業ノートの作成方法及び予習・復習の方法について説明を行った。

授業ノートでの学習内容については，週に１回程度ノート提出を課し，各担当教員が定期的に確認することにより，個別指導を繰り返し行っている。



［授業ノートの実際①］



［授業ノートの実際②］

［放課後学習会の様子］

［放課後学習会：生徒が作成した教材例（ガス交換について）］

【放課後学習会の実施】

本校における放課後学習会は，上級生がこれまでに学んだ専門知識を下級生に教えることにより，曖昧であった知識をより明確化し，学びを深めることを目的としている。生徒同士の学びの場をつくることにより，普段の授業とは違った環境の中で理解を深めると共に，コミュニケーション能力を高めることも意図している。

昨年度から高校３学年を各学年３～４人ずつのグループに編成し，各グループには教員１人が担当するようにした。学習内容は，３年生を中心に解剖生理についての放課後学習会を行った。今年度も１年生の解剖生理の学習進度に合わせ，毎時間ごとに課題を設定している。学習会の中心となる３年生には，事前に担当教員に学習内容や使用教材について指導を受けたうえで実施するようにし，学習内容の偏りや誤りがないようにしている。今年度は９月から週に１回，30 分程度実施している。

(3) 考察及び成果と課題

① 看護実践能力の基盤づくり

【看護技術プログラムの作成及び評価】

教員は，看護技術プログラムを作成することにより，各担当科目の関連性を意識しながら授業を展開することができており，生徒は，既習の授業ノートやポートフォリオ等で資料を集め，授業に臨むことができている。

看護技術プログラムを運用していくなかで，実習での「看護技術経験アンケート」の結果を比較した。アンケート結果については，統計処理ソフト SPSS.Ver15 を用いた。検定については t 検定にて行った。

検定結果から，平成 19 年度入学生の３年次と研究対象学年の３年次とでは，看護技術 86 項目のうち 21 項目で自己到達度の高まりが見られた。中でも「清潔・衣生活援助技術」「症状・生体機能管理技術」「感染の予防」「安全管理の技術」

の項目で有意差が見られ，特に「バイタルサイン」「スタンダードプリコーション」「体位保持」では，はっきりとした有意差が見られた。

ただ，本校では高校については３施設で同時に実習を行っている関係上，施設による差が見受けられる。それは，各施設が地域で果たす役割も異なるため，実習で出会う患者や看護も違い，経験できる看護技術にも差があると考えられる。また，近年の患者の権利擁護の点からも，以前の実習に比べ，経験できる内容も限定されてきていることを考慮する必要がある。

【実習施設に向けた授業公開について】

今回のアンケートの実施・意見交換により，臨床側の求めている看護師像と学校側の育てたい看護師像の違いを明確にすることができた。それを踏まえ，授業公開を実施し，臨床指導者を対象とした授業後の結果から，「学校で学んだことを，実習でどのように指導してよいかが分かり，生徒理解にもつながった」「自分が習った技術内容と違いがあり，生徒の学んだことを大切にしたい」との回答が多数あった。

このように施設側が学校での生徒の現状を実際に目にすることで，生徒理解が深まるなど学校側と実習施設側双方の連携を密にする場が重要であることがわかる。今後も授業公開の場を設定し，より効果的な臨地での実習が行えるよう連携を図っていきたい。

② 専門知識の定着と基盤づくり

【授業参加オリエンテーションについて】

授業ノートの作成の実態とその効果について，生徒・教員双方にアンケートを実施した。また，H20 年度入学生の２年次と３年次の授業ノートに対する取組について比較・検討を行った結果，研究対象学年は他学年に比べて生徒の意欲的な取組がなされており，家庭での学習が定着し，授業理解に大いに役立っていることが分った。（図１～６）

授業ノートの活用がうまく進められている生徒と努力を要する生徒では，成績にも大きな差があることも見えてきた。

今後の課題としては学年が進むにつれ，専門科目が増えるため，授業ノートの整理にもかなりの時間を要するので，繰り返し授業ノートの指導が必要となる。学習方法が確立できていない生徒に対し，より個別的な指導の工夫が必要である。また，課題の多さにモチベーションの低下が若干ではあるが認められる（図７）。そのため，今後生徒の学習に対する精神面への支援が必要であると考える。

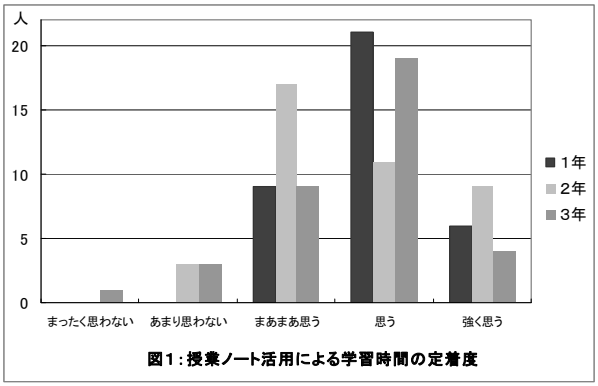


図1：授業ノート活用による学習時間の定着度

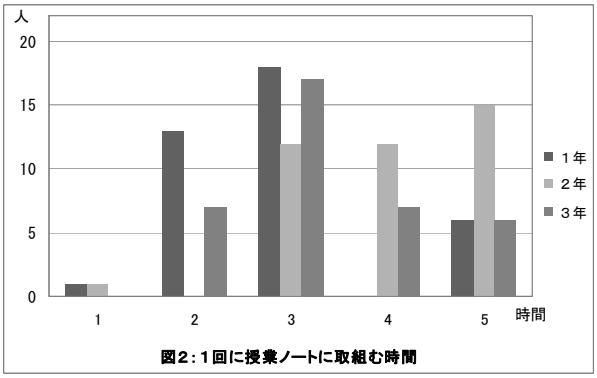


図2：1回に授業ノートに取組む時間

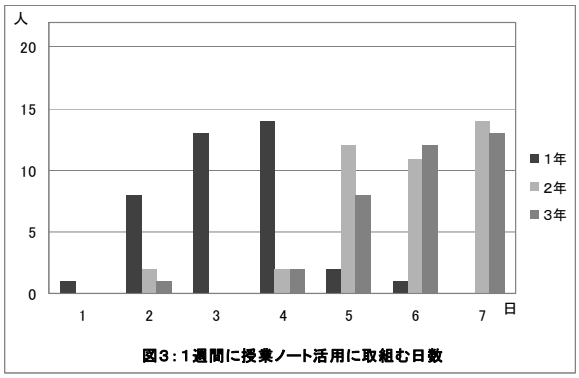


図3：1週間に授業ノート活用に取組む日数

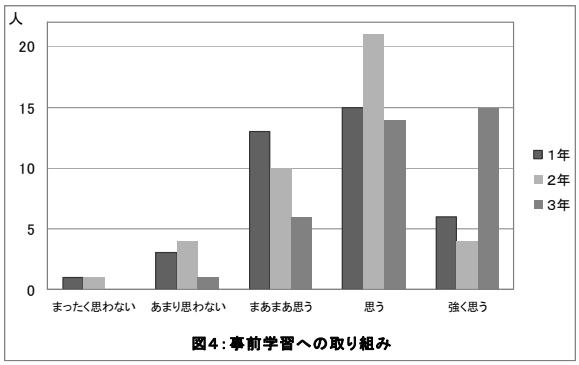


図4：事前学習への取り組み

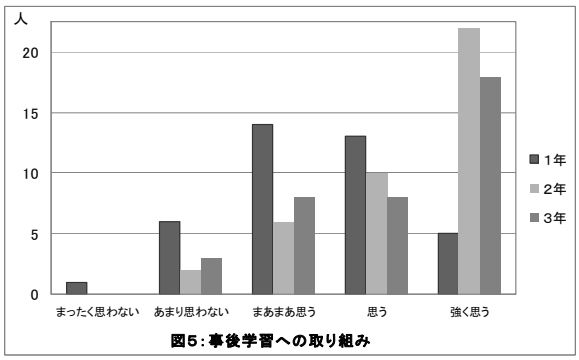


図5：事後学習への取り組み

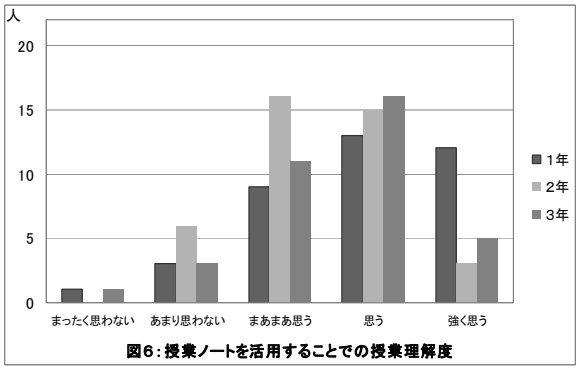


図6：授業ノートを活用することでの授業理解度

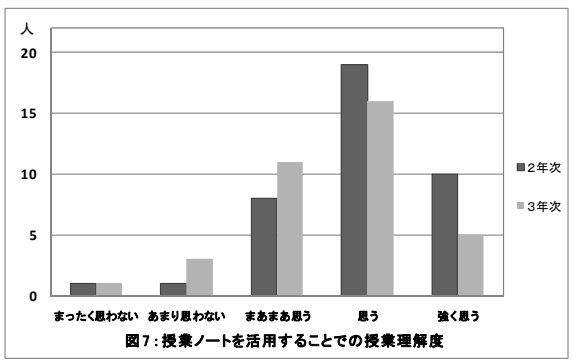


図7：授業ノートを活用することでの授業理解度

【放課後学習会の実施】

放課後学習会についてのアンケート結果から，１・２年生では「授業で理解できなかったことを聞くことができる」「何がわかって何がわからないのかが理解できた」３年生では「文献を手に取る機会が増えた」「わかりやすく伝えることの難しさを知った」などすべての学年において効果的な学習の機会になっていることがわかる。

また，３年生は学習会当初，教材も問題集のコピーが多く見られた。しかし次第に教材の工夫が見られるようになり，自分たちの知識が深まるとともに，教材に使用する模型等を作成したりするグループが多く見られた。放課後学習会では，上級生としての責任を果たすだけでなく，知識のイメージ化を図ることができ，より学習効果を高めることができたと考える。

放課後学習会当初は，専門知識の理解を深めることを目的としていたが，学年を越えた交流により，授業ノートのとり方や勉強の取り組み方など学習面での疑問等について，生徒同士で情報交換することができ，個々の生徒が抱える課題解決に対し，効果が高いと考えられる。

改善点として，グループ人数の多さや，説明をする際にホワイトボード等物品が不足するなど物理的な面での改善が必要であると考える。

３　研究の成果と課題

H20 年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部が改正され，看護実践能力の育成が求められるようになった。改正の主旨をもとに，本校の生徒の実態及び課題把握のための調査を行った結果，本校における課題が明確になった。そこで，本研究にあたり，看護基礎教育の見直しを行い，学内で学んだ知識・技術・態度が看護臨床実習で効果的に

統合することができるよう，看護技術プログラムを導入するとともに，看護技術の定着度の評価方法の検討を行った。また，専門知識の基盤形成のために，家庭での学習の習慣化及び円滑な授業参加のための授業ノート指導，放課後学習会を行うことにより，これまでの専門知識を深め，知識を定着させるように取り組んだ。こうした意図的な関わりの中で，生徒が看護実践能力の基盤を形成していくことができると考えた。

その結果，前述の「看護技術経験アンケート」からも，生徒が実習で行える看護技術が増え，積極的に実習に臨むことができていることがわかる。看護技術プログラムを運用していくうえで，基礎看護技術を教授する際には，単に看護技術の手順を教えるだけではなく，看護技術を行う際の患者の観察視点や，患者の安全・安楽について常に考えながら行うよう意識的に授業や演習において指導を行った。また看護技術の評価方法の検討を行った。

上記のアンケート結果では，「症状・生体機能管理技術」「安全管理の技術」の項目で有意差がみられ，アンケートの細目を見てみると，「バイタルサインの測定と観察」「スタンダードプリコーション」については大きな差が見られ，教育的効果があったことがわかった。

２年間の様々な取組によって，看護実践能力の育成がどの程度形成することができたかを「看護実践能力アンケート」によって検討した。その結果，生徒と教員，生徒と実習指導者ではほとんどの質問項目で有意差があり，生徒の自己評価に対しては教員・実習指導者は厳しい評価をしていることがわかった。また教員・実習指導者間では「看護の計画的な展開能力」「ケア環境とチーム体制整備能力」において有意差が見られた。

しかし，看護実践能力については生徒の実習前後の比較（表１）から，質問項目 44 項目中 22 項目において有意差が見られた。特に「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」において 14 項目中９項目で有意差が見られた。これは看護において基盤となる関係性の構築やコミュニケーション能力の向上が図れたと考えることができる。このことについては臨床指導者側からも，カンファレンスや日々の反省会において意見交換の深まりが見られるようになったと，評価を得ることができている。

また，校内での授業場面においても，生徒の積極的な授業参加が見られるようになった。特に３年生ではこれまでの知識をもとに事例演習を行っているが，その際，ロールプレイングをもとに，各グループでのディスカッションや全体での意見交換を活発に行うことができ，その際も根拠に基づき意見を述べることができるようになるなど，生徒主体の授業展開を行うことができている。生徒も「自分がどこがわかっていないかが確認でき，到達度が理解できた」など，前向きな意見が多く見られ，コミュニケーションを取り合う中で，理解が深まり，これまでに得た多くの知識を統合することができていると考える。

アンケート結果の分析結果から，これまでの学校内での教授活動により，生徒の自己肯定感の高まりがあった。これはキャリア発達の基盤を形成する上での自分に対する自信が重要な意味を持つと考える。今後は，自己評価の高まりとともに，客観的に自己を振り返ることができる力を育成していくことが課題となる。今回作成した看護技術プログラムを活用し，自己評価と他者による客観的評価の一致が見られるよう，自己課題の発見・解決に向け取り組んでいきたい。